# 学位請求論文審査要旨

報告番号　甲　第　　号

氏名　　鈴木　優

論文題目　　フリードリヒ・シラーと文学の使命　―人間形成における「美的仮象」の役割―

審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授・大学院社会学研究科委員
教育学修士　　眞壁　宏幹

副査　慶應義塾大学文学部教授
教育学博士　　綾井　桜子

副査　慶應義塾大学名誉教授
文学博士　　斎藤　太郎

副査　立命館大学文学部教授
教育学博士　　西村　拓生

## I　本論文の概要

本論文は、フリードリヒ・シラー（Friedrich Schiller, 1759-1805）の文学を通じた美的人間形成構想を歴史的・思想史的に再構成することで、その構想の中核にある「美的仮象」に対する新たな解釈を示し、現代における美的人間形成論の議論に寄与することを目的としている。

本論文は三部構成になっている。第 I 部では若きシラーがカール学院において 18 世紀ドイツの啓蒙期に盛んになった人間学や医学など経験的人間研究に取り組んだ時期を、第 II 部では歴史研究と歴史叙述に本格的に取り組んだ歴史家としてのシラー（1786 年頃から 1791 年頃まで）を、そして第 III 部ではカント美学と取り組んだ 1791 年以降の美学研究期シラーを考察し、その根本的問題関心が初期から後期まで一貫して「人間の使命」たる人間形成をめぐる問題であったことを明らかにしている。カント美学の影響のもとで後期著作『人間の美的教育について』（*Über die ästhetische Erziehung des Menschen,* 1795、以下『美的教育書簡』）を解釈してきた先行研究からだけでは引き出すことのできないシラーの人間理解や人間形成観、そしてその媒体たる芸術（「美的仮象」）のあるべき姿を明らかにしている。すなわち、人間が人間らしくあるため（「人間の使命」）には理性と感性を媒介する美的経験が重要であることを主張するのみならず、その作用を発揮するために陶冶材（「美的仮象」）が有すべき条件をも論じたものでもあったことを明らかにしている。論文の構成（目次）は以下のとおりである。各章の詳細な紹介は割愛する。

## II　本論文の構成

序論　シラー美的人間形成構想の再解釈に向けて
第 1 節　研究関心と研究目的
第 2 節　研究史的展望と本研究の位置づけ
(1)『美的教育書簡』という難問
(2)「美的仮象」への問い
第 3 節　研究方法
第 4 節　本論の構成

第 I 部　哲学的医師シラーによる「人間の使命」の探求
第 1 章　人間学的転換
第 1 節　初期シラーと人間学的転換
第 2 節　哲学的医師と人間学
第 3 節　18 世紀における「人間の使命」論
(1) 神学者シュパルディングの「人間の使命」理解
(2) メンデルスゾーンとアプトの論争
第 2 章　哲学的医師シラー
第 1 節　物質と精神の関係
(1)　「人間の使命」
(2)　中間力の理論
第 2 節　経験的な人間学の試み
(1)　「物質的・身体的連関」
(2)　「動物的営み」から「精神的営み」への移行
第 3 節　初期シラーの人間学の二重性
第 3 章「人間の使命」というアポリア
第 1 節　若きシラーの懐疑
第 2 節　唯物論の厚かましき攻撃
(1) ユリウスの絶望
(2) 牢獄の中の囚人
第 3 節　「人間の使命」の捉え直し
(1) 個と類
(2) 諦念と世界史

第 II 部　歴史と「人類の使命」
第 4 章　シラーの歴史理解
第 1 節　歴史家シラー

第 2 節　人類の発展史としての歴史
(1)「移行」過程としての人類の発展史
(2) ルソーへの挑戦
第 3 節　歴史哲学の意義
第 5 章　歴史叙述と人間形成構想
第 1 節　基準と目的としての「人間の使命」
(1) リュクルゴスの立法
(2) ソロンの立法
第 2 節　歴史叙述の方法
第 3 節　「歴史を通じた人間形成」という構想

第 III 部　仮象と美的人間形成
第 6 章　シラーの近代批判と文学の使命
第 1 節　「文学の使命」の自覚
第 2 節　分裂と分断の時代としての近代
第 3 節　理想の文学の根本原則
(1) 詩人の人格の高尚化
(2) 理想化技法
(3) 補論：民衆詩人シラー？
第 4 節　詩的真実の追求
第 7 章　近代人のための美的人間形成構想
第 1 節　近代的主体への批判
第 2 節　現実と理想
(1) 理想としての古代ギリシャ
(2) 回顧と未来の芸術
第 3 節　芸術を通じた「回り道」構想とその難点
第 8 章　美と「移行」問題
第 1 節　『美的教育書簡』の「移行」問題
第 2 節　「移行」の超越論的考察
(1) 人間学と超越論哲学の接合の試み
(2) 自由への「移行」についての超越論的考察
第 3 節　「移行」の経験的考察
第 4 節　「跳躍」を可能にするものとは何か
第 9 章　「美的仮象」の条件
第 1 節　「美的仮象」とは何か
第 2 節　主客の間に成立する「美的仮象」

（1）感性的・客観的美の追求
（2）「自由の仮象」としての美
（3）積極的な「自由」の経験
第 3 節　「自由の仮象」の客観的条件
（1）自由はいかに表象されうるか
（2）　芸術美の追求
第 4 節　「美的仮象」と「詩的真実」

結論　シラー美的人間形成構想とは何だったのか
第 1 節　現実からの自由
第 2 節　「自由」の理念の感性的経験としての美
第 3 節　シラー美的人間構想の可能性と限界

あとがき
Zusammenfassung
初出一覧
文献一覧

**III 本論文の評価**

公開審査会（2022 年 11 月 12 日 13:30~16:00、南館 4F ミーティングルーム）が開催され、審査者から以下の諸点が本論文の特筆すべき点として指摘された。

１）シラー研究には長年に亘る膨大な蓄積があるため、今日の研究者が論じようとすると、往々にして細部の研究に流れる傾向があるが、鈴木君はあえてシラーの生涯を通したさまざまな著作や活動を総合的に論じるという困難な課題を自らに課し、この巨大な仕事に取り組み、無数の細部に的確な目配りをしながらも自らの問題設定をけっして見失うことなく、きわめて明晰・明快な論理展開によってシラーの思想的発展を再構成してみせている。シラーの難解なテクストをわかりやすく敷衍して説明する能力、小気味よいリズムを感じる論理的な叙述能力は、いずれも鈴木君の研究者としての並々ならぬ力量をうかがわせるものである。

２）これまでドイツや日本でなされてきた古典的シラー研究が、カント超越論美学の影響のもとでシラー美的教育論を解釈する傾向を強くもっていたのに対し、最新のシラー研究を十分咀嚼しつつ、カール学院で医学生だったシラーによる医学や人間学など当時の経験研究の受容とその超克の試み、イェナ大学教授就任直後の歴史研究（例えば、『三十年戦争史』）への傾倒と離脱の過程を丁寧にたどり、シラーの「人間の使命」をめぐる思考の格闘を明らかにした点は高く評価できる。例えば、カール学院における二つの卒業論文を対象にすることで中世的な神学的枠組みと 18 世紀人間学的な唯物論的世界観とのあいだの葛藤が、その後のシラーを超越者不在の世界における人間の完成可能性の追求に向

かわせる原動力となったとの指摘は、非常に斬新でシラー研究上価値のある指摘といえる。また、第II 部でシラーの歴史研究期を扱い、超越を断念したシラーが人間の発展形成を歴史的時間軸に投影することによって、そこに世界内における完成可能性を追求しようとした過程を析出しつつ、シラーが歴史の事実が必ずしも人間性の発展を示すわけではないという問題に直面することで歴史研究を離れ、カント研究を経た上で「美的仮象」（芸術）のなかに人間の自己完成への希望を見いだすことになった過程を詳細に描き出すことにも成功している。換言すれば、なぜ最終的に『美的教育書簡』が書かれ、なぜそれがあのような複雑な構造（超越論的考察と経験的考察の入れ子構造）をなしているのかを、長いタイムスパンでシラーを考察することで初めて明らかにした。

3）『美的教育書簡』と『カリアス書簡』との関係を、受容美学に力点を置いた前者に対して制作美学に力点を置いた後者と相補的に理解することにより、シラーの美的教育構想をより包括的に捉え直している点、それによって、自然状態から道徳的状態への「移行」はいかに可能なのかという美的教育論の根本問題に対し、『カリアス書簡』における「美的仮象」成立の規範的条件の検討を通じて、一定の説得力のある答えを出すことに成功している。すなわち、シラーの「人間の使命」が当時よく主張されていた人間諸力の調和的発展（人間性の完成）という教育構想の圏内にはあるものの、それにとどまらず、「美的仮象」（この場合は文学作品）の制作と受容によってなされる理由を、「美的仮象」の独特な人間形成作用、すなわち、現実からの解放＝距離化（消極的自由）と、世界との新しい関係を取り結ぶ行為可能性の領野の開示（積極的自由）に見ていたことを示すことに成功している。

4）本論文は、シラーがこのように理念的（超越論的）に芸術の人間形成論的意義を述べるだけではなく、芸術を含めた文化形成の原動力を人間学的に「素材における過剰」「装飾の喜び」に見ていたことも明らかにしている点も高く評価できる。この着眼は、『美的教育書簡』の仮象論の検討において、視覚と聴覚の人間学的な（さらに現象学的ともいいうる）叙述に着目している点にも発揮されており、非常に興味深いシラー解釈となっている。美的経験の感覚性こそが、シラーがカントの「主観主義」を乗り越え、近代的・能動的な主体のあり方の転換に向かう契機となったとの見立ては、シラー美的教育論がもつアクチュアリティの一端を示すことになっている。

5）人間形成作用を発揮しうる「生きた形態」たる「美的仮象」が、感性と理性を共に駆動させるような客観的性格を保持している必要があることを確認しつつ（『美的教育書簡』の考察）、さらに考察を先へ進め、『カリアス書簡』の解釈から、感覚的快にも概念的認識にも回収されず諸力の遊動状態を引き起こす作品の条件が、その対象たる世界の自律性（自己規定性）を十分に表現する技巧を備えている点に求めていることを明らかにした。このことによって、論文冒頭で述べられた教育課題、すなわち世界の代表的提示をどのような基準に基づいて行うかをという問題に一定の答えを示した。

上記のように、シラーの美的人間形成論を総合的かつ説得的に論じた本論文は審査者から高く評価され、出版されれば、シラー思想の全体を知るための格好の入門書になる可能性があるとの声が相次いだ。しかし同時に、以下の課題も今後可能な限り取り組むことが求められた。

1）本論文のようにシラーの美的教育論を捉え直した時、あらためてカントとシラーの関係はどのように

理解されることになるのか、具体的には、カント的な諸原理に依拠しているという『美的教育書簡』第一書簡の冒頭のシラーの言葉をどのように理解するのかという問題。これに対する応答では、シラーにとってカント哲学は、自らに固有の問題構制を「後から」裏書きするものであった、というものだった。本論文の論旨から、この応答はひとまず納得できるものの、カント思想がいわばモデルネに固有の人間の条件を哲学的に表現したものであるとするならば、本論文で示唆されているカントの乗り越えという問題をあらためてカントとの関係を明示的に問い直すことで行う必要があり、美的教育論のアクチュアリティを考えるためにも重要だと思われる。著者のこれからの課題となるだろう。

2）「美的仮象」が技巧を尽くして表現すべきとされる「物の自然本性（Natur des Dings)」「物の人格（Person des Dings)」「対象の本質的な形式」とは何か。カントの「物自体」とどう違うのか。物が自己規定しているように見える事態を指すともいわれるが（224 頁以下)、これは具体的にはどういう事態を指すのか。人間形成に寄与しうる芸術の規範として重要になる概念なので、もう少し詳しく論じてほしいとの質問に対しては、シラー自身、それを明晰に説明することを避けている節があり、慎重に扱いたい問題であるとの応答があった。１）のカントとの異同に関係する重要な問題であるとの認識も示された。

3）西洋において文学による人間形成といった場合、文学のジャンルとしての悲劇がもっていた意義は非常に大きい。例えば、アリストテレスの『詩学』を理論的素地としながらエリート層の教育において、古代ギリシア悲劇やこれに範をとった古典劇が重視されてきた。このような観点からみたとき、「文学の使命」において悲劇という文学ジャンルはどのようなものとして考えられているのだろうか。シラー『悲劇芸術について』が、(「歴史的真実」と区別される)「詩的真実」の意義を論じるものであったというのであれば、悲劇のもつ人間形成的・自己形成的な役割をシラーはどのように考えていたのか。悲劇が崇高の感情に依拠する芸術であること、シラー『崇高論』では、美的教育は崇高の経験によって完全なものとなると論じていることからすると、崇高と美的人間形成との関連（およびこれらにおける悲劇の役割）についても問う必要があるのではないか。この質問に対しては、アリストテレス以来、悲劇の問題はたしかにヨーロッパ文藝史において最重要なテーマであるし、崇高も 18 世紀思想史・美学史で重要な概念だが、それだけにこの問題を詳細に論じることは見送らざるをえず、触れるにとどめた。重要性は十分認識しているが、今後の課題としたいとの応答があった。

4）当該論文の表題に「文学の使命」が挙げられているにもかかわらず、第 III 部において「文学」は積極的に取り上げられていない。それはなぜか。この指摘には、「人間の自己形成過程における読書の役割」が論者の教育学的関心の原点にあったため、このような課題設定になったが、『美的教育書簡』における「美的仮象」のモデルが造形芸術であるため困難な作業となった。シラーの人間形成論における文藝の意味については、『菩提樹の下の散歩』を扱った箇所で一部論じたが、美的仮象論との関連における文藝の意味については今後の研究課題としたい、との応答があった。

5）1990 年代以降のドイツ文藝学におけるシラー研究では、急進啓蒙主義的秘密結社「イルミナーティ」との関係が論じられており、『美的教育書簡』は、イルミナーティの教育実践に対するシラーの反論として読むことができる、との解釈もあるが、その関連は考慮しなかったのかという質問に対し、18 世紀後期のドイツ教育論・教育実践においてイルミナーティが重要な意味をもつことは認識しているが、

今回の論文はシラー個人の思想的発展に焦点を当てる方法を用いたこともあり、この関連について伝記的事実を背景にしながら論じることはあえておこなわなかった、との回答があった。

6）「美的仮象」による人間形成というプロジェクトは、当時においても現代においてもやはり識字能力に卓越した教養層に向けた高級文化論にとどまるのではないか、この意味でガダマーやイーグルトンの批判はやはり越えられないのではないか、また、現代において「自律的作品」という芸術観は後退しており、芸術の意味と意義は特定文脈における受容プロセス、ないしは遂行的行為のなかで生成してくるという理解が主流となっている、加えて、現代において芸術（文学）はさまざまなメディアによって流通している状況にある。シラーの自律的作品というコンセプトやそれに基づく教育構想はまだ可能なのだろうか。シラー美的教育構想の現代における意義に関するこの問いに対しては、たしかに当時の教養層に向けた構想という側面は否定できないが、民衆におもねるのでもなく、かといって高踏的でもない文学作品を意識的に書きつづけたシラーを考えれば、その美的人間形成論が高級文化論に回収されるわけではないとの応答がなされた。これをきっかけに、シラーも創作活動の中で重視していた「詩」や「演劇」というジャンルがもつ可能性、とくに文字テクストを超える身体性や「声」の人間形成論的可能性という問題について活発に議論が展開された。

## Ⅳ 審査結果

上記のような課題は指摘されたものの、いずれもこの論文の趣旨・目的を大きく越える「大問題」ばかりであり、博士学位請求論文としての本論文の価値をなんら貶めるものではない。むしろそれはこの論文がシラー美的人間形成構想の考察として高度な水準に達しているからこそ出されたものであり、今後の研究への強い期待感からあえて提出されたといった性格のものであった。したがって、我々審査員一同は本論文が課程博士（教育学）に十分値するものと判断する。